

最優秀賞受賞作

花丸の魔法

藤本ゆきな

手術に向けた注意事項を聞き、子ども用の小さなベッドに横たわる。腕の中には落ち着いた様子の娘。まだ幼く、翌日受ける手術についてははっきりとは理解していないようでしたが、病院という場所でされる事はよく知っている子でした。

「心臓と、腎臓と、それからお臍。一緒に頑張りましょうね。」生後1カ月の検診でそう言われた娘にとって、病院はよく痛いことをされる場所でした。

この日も着くなり「帰る」と大泣きしていたのですが、看護師さんの登場で状況は一変。「はじめまして。僕はオペ看のササキです。よろしくお願いします。」ササキさんは、娘を置いてきぼりにしないよう視線をやりつつ、易しい言葉で私に手術に向けた説明をしてくれました。しばらく話を聞いていると、突如娘が服を捲り上げ一言。「せんせ、かかかちた。」かかかち（描き描き）、つまりマーキングが不服だったらしい娘に、ササキさんはその意味をユーモアも交え丁寧に伝えてくれました。会話に参加できた事、その中で笑顔にさせて貰えた事で、娘は冒頭の通り落ち着きを取り戻し、大人しくベッドに入ってくれました。

「だいじょぶ。はなまり（花丸）にする。」手術の朝、お臍の横に書かれた二重丸をさして娘は笑っていました。ササキさんのユーモアが、娘の心を支え、幼い我が子に手術を受けさせる申し訳なさを感じていた私の心まで軽くしてくれていました。まるで魔法にかかったようでした。

手術室看護師さんのお仕事＝器械出しというイメージでしたが、この経験を通してそれだけではないことを知りました。言葉や表情、処置等行動の全てをもって、患者本人のみならず、家族の心身までケアして下さる手術室看護師さん。勇気、安心、健康、そして何より、笑顔をくれてありがとう。

（講評）

看護師が直面する日々の忙しさの中で、どのようにして患者さんに寄り添い、温かい看護を提供し続けるかというテーマについて、非常にリアルで感動的に描かれていました。娘さんが手術に対する不安を感じながらも、ササキさんのユーモアと優しい対応によって落ち着きを取り戻す様子は、看護師の細やかな気配りがどれほど患者さんや家族にとって大きな意味を持つかを強く伝えています。

そして、ササキさんが娘さんに対して丁寧に言葉をかけ、笑顔を引き出した瞬間は、読者にも深い感動を与えます。また、娘さんを何もわからない子どもではなく、ひとりの人格を持った対象としてササキさんは見ていることが、親御さんにとってはとてもうれしかったのだと思いますし、ほほえましい光景も浮かんできます。作者自身が抱えていた「幼い娘に手術を受けさせる申し訳なさ」が軽減され、看護師の対応によって心が軽くなったことが描かれている部分も、看護師が家族全体にどれだけ重要な役割を果たしているかを理解させてくれます。

優秀賞受賞作

太陽の手

須山 恵美

人生二回目の手術日、私は「いってきます」と扉をくぐりました。背中には祈るような家族の視線が感じられたのでした。

心臓に病気があると分かったのは高校一年生の春です。将来のことを考え手術を受けたものの、わずか数カ月で再発。以来、多少の制限はあるものの日常生活はおくれるため、経過観察で過ごしていました。

事態が悪化したのは大学院への進学後。睡眠不足や人間関係の悩みなどが重なり、不整脈や発作が頻発するようになったのです。そして数年後にはとうとう日常生活にも支障をきたすようになり、私は二回目の手術を決意しました。

まったく眠れないまま迎えた手術の日。私の場合、部分麻酔なので意識がある状態で手術が行われます。腕に刺された点滴を引きずりながら、私は手術看護師さんに付き添われて手術室へと向かいました。家族の視線を断ち切るように扉が閉まると、なぜだか急に足が前へ動かなくなってしまったのです。思い返せば私はこの日まで、家族や友人が心配しても「大丈夫、大丈夫」と小さな嘘をずっとつき続けていました。しかし心の中では怖い、痛い、失敗…とありとあらゆる不安が台風のように暴れていたのです。その刹那、手術看護師さんの声が私の心に入ってきました。「大丈夫。今度は絶対成功するから。」そしてぼんと背中に添えられた手は太陽のように温かく、不安を晴らしてくれました。こうして私は手術を予定通り受けることができ、手術看護師さんの言葉の通り成功したのでした。

あれから私は国語の先生をしています。志望理由書を添削していると、様々な夢が書かれています。その中には看護師を目指している生徒もおり、読むたびにあの時の光景が蘇ります。そして「私を救ってくれた手術看護師さんのように育ってほしい」、そう願いながら私は今日も赤いペンを走らせるのです。

（講評）

ご自分の体験である手術時の情景とその思い、そしてそれを支えた手術室看護師の看護の様子がイキイキと語られているとともに、手術室看護師が寄り添ったことで安寧を得られたことへの感謝の気持ちも綴られています。

さらにその経験が、将来、看護師を志そうとする生徒への期待を教師の視線からまとめてあり、心に響きました。

また、手術室看護師は患者から忘れ去られる存在であることが多いのですが、タッチングが患者さんの不安を和らげて、勇気づけることに繋がったことがとても良く分かる作品でした。

優秀賞受賞作

天からの使い

三澤 勇悦

『スタンフォードA型急性動脈解離』妻の病名である。ちょうど桜が満開となる季節の夜だった。突然「胸が苦しい」とうずくまり動けなくなった。救急車で病院に着き、検査をして医師から告げられた言葉が「緊急手術が必要です」だった。何が何だか解らないままに様々な承諾書へ署名をさせられ、妻は手術室へと搬送されていった。私は手術室前の薄暗い廊下の長椅子に座り、手術が終わるのをじっと待っていた。桜の季節とはいえ、夜はまだまだ冷える。私たち夫婦に子供はおらず、喧嘩も多かったが笑いも多く、旅行にも多く出掛けた。その妻との平凡な日々が走馬灯のように頭の中を流れていった。

どれくらいの時間が経っただろうか、ふっと声をかけられた。「手術室看護師のAです。手術は順調です。奥さん頑張っていますよ」と淡々と、それでいて包み込むような優しい声だった。そして「夜はまだ寒いですから」と私の肩にタオルケットを掛けてくれた。その優しい声と暖かいタオルケットに、折れそうだった気持ちが持ち直したのを覚えている。それから手術の状況を何度か伝えに来ては励ましてくれて、簡単ではあったが看護師さんからの説明で『妻は助かる』と根拠のない確信をした。業務の一環なのかもしれないが、私にとっては何とも心強い看護師さんであったことに間違いはない。

昔は看護師のことを『白衣の天使』と呼んだ時期があった。「今の時代にはそぐわない」と言われるだろうが、あの時の手術室の看護師さんは私にとって「神様が妻は大丈夫だ」と言っているのを伝えにきた『天からの使い』だった。折れそうな気持ちを支え持ち直させてくれた、あの看護師さんはどうしているだろう。名前も忘れてしまったが、妻と2人感謝をしながら今日も元気に暮らしている。

(講評)

緊急手術を受ける患者家族の手術前の説明を聞く思いや不安がしっかりと述べられています。また、無事に手術が終わるのを待つ家族の「信じたい気持ち」を後押しする手術室看護師の患者さんと家族の気持ちを汲みとった関わり、手術室看護師の心くばりに対する感謝が記されています。

現代の手術室看護師の仕事(看護)である術中看護が患者家族への力となっていることがよくわかり、術中訪問に力を入れたいと思わせてくれる作品でした。